

## 論文の内容の要旨

論文題目 〈サラリーマン〉の文化史  
近現代日本社会における安定への欲望をめぐる考察  
氏 名 鈴木貴宇

本論文は、近現代日本社会において「中庸」ないし「安定」の指標として機能してきたと推察されるサラリーマン表象の成立とその変容を扱うものである。日本社会における「ありふれた一般人」の総称とされるサラリーマンは、いつ社会に登場したのか。また、サラリーマン層を「安定」の表象とする社会意識の浸透は、どのような歴史的、社会的背景を有するものなのか。「ありふれた一般人」という、集合体としてのみ語られがちなサラリーマンに焦点を当て、彼らが生きた各時代の社会状況において、どのような心情が様々な文化表象に反映されてきたかを明らかにする。ここで言う文化表象とは、具体的には写真、漫画、映画、そして文学作品などを含むが、本論ではその中でも文学作品の中に描かれたサラリーマンの分析に重点が置かれることになる。文学作品という虚構の背後に控えた社会状況をサラリーマンの視点から読み解いていくことで、かつて「一億総中流」と言われ、その象徴として「安定と平凡な家庭生活」の代償に働き続けたサラリーマンたちの表情が、各時代を生きたりアリティを伴って浮彫となることを企図している。

本論の構成は次の通りである。

序章にて「サラリーマン」という階層と用語の生成および浸透過程を先行研究の紹介と併せて説明する。「文化史」というアプローチを採択することで、従来の「サラリーマン研究」が触れてこなかった「描かれたサラリーマン（表象）」と実像のズレ、またそうしたズレに込められた様々な心情の分析がどのように可能かという視角の提示を行う。

第1章は、日本の近代化が幕を開け、株式会社の誕生といった資本主義体制の黎明期とも言える1880（明治20）年代から1910年代を扱う。この時期にはまだ「サラリーマン」という用語は登場しておらず、また就業人口も稀少なため、官吏（役人）と実業家の表象分析が

主となる。教育制度の完備が急務とされた当時、地縁や血縁から切れた青年たちが「東京」へと流入し、やがては可視化された近代の表象として定着する過程を追う。この章においては、近代文学の嚆矢ともされる二葉亭四迷による『浮雲』(1888)の主人公、内海文三の挫折と葛藤を資本主義化過程により生じたアノミーとの関連で分析する。

第2章では、ヨーロッパで起きた第一次大戦の影響で、急速に訪れた軍需景気の結果、株式会社の増加と東京駅の開業(1914年)に代表されるように、スーツを身に着け郊外の「文化住宅」から丸の内の会社へと通勤する、といった今日のサラリーマンのプロトタイプが出現した1920(大正9)年前後を見ていく。「サラリーマン」という用語もこの時期からわずかながら使用が見られ、民間企業の台頭が大正期の文化に与えた影響に触れることにもなるだろう。文学作品でも岸田國士が若いサラリーマン夫婦を題材とするなど、今日の〈サラリーマン〉イメージの定着がこの時期に定着を始める。岸田の戯曲『紙風船』分析を通じて大正期の「文化」への憧憬が続く昭和初頭の「モダン・ライフ」に引き継がれていく様態を扱う。

第3章は、関東大震災(1923年)と深刻な経済不況で始まった昭和初頭のサラリーマン表象を扱う。この時代は、「モダン都市東京」(海野弘)の用語で知られる都市大衆文化の爛熟期であり、大卒出のサラリーマンも就業人口構成上の厚みを増し、その呼称も定着した。昭和モダニズム文化の文脈においてサラリーマンがどのように描かれ、また激化する階級闘争の中で「青白きインテリ」としての自責を抱えながら彼らが「モダン・ライフ」を牽引していったダイナミズムを論じていく。モダニズム文化の書き手の一人、浅原六朗に代表される〈サラリーマン〉を主人公とした小説も多く発表されており、イデオロギー闘争と日本社会の軍国主義化が年を追って濃厚となる時代に、サラリーマンがどのような思想を胚胎させていたのかを考察する。

第4章は敗戦を経て、サラリーマンがアメリカの民主化を大衆的な位相で象徴する存在として描かれる様相を扱う。高度成長前夜でもある1950年代初頭に、サラリーマン小説の代表作家として源氏鶏太が人気を集めるが、そこに登場するサラリーマンたちが戦前の彼らとどのように異なるのか、また労働組合運動の過熱化といった歴史的現象を大衆文化はどのように捉えていたのかを雑誌等の資料から明らかにする。私見では、この時期に「専業主婦とサラリーマンの夫」による核家族への欲望が「会社」に託され、それが源氏の小説では「社内恋愛」の推奨として処理されていると考えられる。分析対象となる作品は、戦後初の大ヒットとなった菊田一夫原作のラジオドラマ『君の名は』(1952)と、「サラリーマン小説」の嚆矢とされる源氏鶏太『三等重役』(同)である。占領終結の年に発表された両作品が、戦後日本社会が始動する時期に大衆的なヒットとなった背景を考えていく。

第5章では、高度成長が本格的に始動する以前の1950年代に焦点を当て、その中でも戦前は展開され得なかったホワイトカラー層による労働運動の事例として、銀行における労働組合とその文化活動を取上げる。サラリーマンを通史的に見ていくと気が付くことは、時代は変われどもその存在は常に「個」として生きたいとする欲求と、「集団」の中で規範を守らねばならないことの葛藤にさらされていることだ。その間をつなぐ中間集団として、戦後の民主化により全産業的に組合活動が活況を呈するが、銀行という資本主義経済の中核に位置する組織で展開された運動には、ホワイトカラーである自らのアイデンティティを問う試みも含まれた。それは「組織」と「個」という普遍的な問いが集約して現れる場でも

あったことを確認していく。

終章では、1960年代の日本社会に起きた階層変動とサラリーマン表象の変容を中心に考察する。1960年代は高度経済成長の最中であり、サラリーマンの就業人口比率も飛躍的に増加を見る。団地生活を経てマイホーム取得へ、という土地家屋所有への欲望が顕著となるこの時代、サラリーマンたちは「未来への投資」として子供と家族に安定を与えるため、また「敗戦」の記憶から遠ざかるため、自身の閉塞感を封じこめて働いた様態を見ていく。具体的には山口瞳による直木賞受賞作『江分利満氏の優雅な生活』(1962)分析が主となるが、流行歌や映画を補助的資料に用いて「遠くへ行きたい」という隠された願望について論究する。結論として、前章までの記述を踏まえて全体の要諦を概観した上で、今後の展望と併せ、本論では考察の対象とすることができなかった1970年代以降の「サラリーマン」について、現時点での論点の整理を行う。